

ORANGE

Vol.30



朝倉美津子《躍動》 2018(平成30年) 田辺市立美術館蔵

《躍動》について

「このたびは めさも取りあへず 手向山 もみぢの錦 神のまにまに」

作品《躍動》は、菅原道真にも歌われた幣(めさ)に着想を得ています。神様に捧げる幣をイメージして、動と張力のバランスの上に造形しました。

絹糸を様々なバリエーションに染め、織上げてから表と裏に反転させて連続の中に不連続性と意外性を表しています。

糸が交わる織の美を追求する私の「ORITATAMU 織/折りたたむ」シリーズの一作です。

糸を全身全霊で染めてから巻き上げ、手織機に掛けて経糸とします。この経糸に緯糸を一越ひと越と織りなしていきます。

機に向かって制作する時はいつも、厳粛な気持ちになります。

一昨年に田辺市立美術館から展覧会開催依頼のお手紙を頂戴した私は、何れともあれ現地訪問をしました。良い所だなあと喜び思い、熊野古道へと、近露王子から継桜王子を目指して勇んで歩き出しました。お天気も良く自然溢れる山道を元気一杯歩きましたが勇ましかったのも束の間、30分も行くと息が切れました。ふと脇道の方を見ると石段の先に朽ちた古寺があり、少し休んでいこうと思いつて行った所、梅の木苔がびっしりと付いた雑木が沢山積み重なっていました。梅の木苔は古木に生える苔で、綺麗な赤紫色に染めることができます。私は30余年前に一頻り取り組みましたが、まとまった量はなかなか手に入らず断念した染料です。「もうこんな機会は二度とない」と小躍りして無我夢中で沢山採取しました。おかげで疲れも吹き飛びましたが、時間が無くなり目的地まで半分も行かずに引き返しました。帰宅後早速この梅の木苔で絹糸を染め、本作に織り込みました。

(朝倉 美津子)

※今回特別に作者の朝倉美津子氏より自作についてのご寄稿をいただきました。



鈴木昭男さんと宮北裕美さんによるクロージングパフォーマンス

インスタレーション《内在》(パイプの空洞に空気が流れ、音が鳴る仕組みになっていました)が設置された展示室で、器や筒状の物を使った演奏が重ねられました。静謐な空間の中で、聴こえないほどの微かな音にまで意識を傾けさせる演奏は、まさにこの展覧会のテーマとなった「音の内在」へと私たちを導くものでした。

最終日のクロージングパフォーマンス「たどり」は、ダンサーでアーティストの宮北裕美との共演となりました。交流スペースと、ガラスで隔てられた庭とを行き来し、時には回廊にまで繰り広げられたパフォーマンスは、一つの場所から美術館の内外へと意識が広がってゆく、展覧会を締めくくるのに相応しいものでした。

今回のインスタレーションとパフォーマンスを通して、「聴く」ことから熊野古道なかへち美術館とその位置する環境を感じる機会をつくってくださった鈴木昭男さんに、心からの御礼を申し上げます。

(学芸員 知野 季里穂)

絵画と出会う「この一点!」

戦後の表現

会場：田辺市立美術館

会期：2019年4月20日(土)～6月23日(日)

菅井汲(1919-1996)は、33歳のときに単身フランスに渡り、以来40年以上パリを拠点に活動して、国際的に活躍しました。菅井は油彩やアクリルによる制作を主としました。版画もフランスに渡ってまもなく、当時契約を交わしていた画廊のすすめでリトグラフ(石版画)を発表したのがきっかけで始め、その後も生涯に亘って制作を重ねました。菅井にとって版画の制作は、時には他の絵画の制作とも相互作用しながら、独自の表現を切り拓くジャンルとなりました。

図版の《青と黒》は、1950年代の終りから60年代初めにかけての菅井の作風をよく示す作品です。それまでの作品にあった地がほとんどなくなり、太い筆致による有機的で簡素な形態が強調されて、タイトルとなった青と黒の色彩が画面に情緒を添えています。(学芸員 知野 季里穂)



菅井 汲 《青と黒》 1960年 石版・紙 個人蔵

編集後記

今号には4月からの展覧会スケジュールを折り込んでいます。2月頃から今年度の展覧会予定について質問を受けることが増え、ようやくこのORANGEで皆様にお伝えできることとなりました。刊行を心待ちにしてくれている方がいると思うと編集にも力が入ります。これからも多くの方に美術館に親しんでいただけるよう頑張りたいと思います。

(F.O.)

REPORT 熊野古道なかへち美術館開館20周年記念特別展『鈴木昭男 — 内在 —』

昨年の10月から11月にかけて熊野古道なかへち美術館の開館20周年を記念した展覧会を開催しました。日本のサウンド・アートの先駆者である鈴木昭男(1941-)による、この展覧会のための新作インスタレーションを披露するもので、「音の内在」についての長年の思索と熊野古道なかへち美術館をめぐる環境から着想された、《内在》、《響》、《句》、《階段》の四つの作品を美術館の内外に設置しました。

鈴木は「聴く」という行為を、独自の思考と方法とで創造的な行為へと導く「場づくり」の手法を一貫し、作品に接する人々をそれまで意識していなかった音を意識することへ、さらには実際には聴こえない音を想像することにまで誘ってきました。この展覧会も、鈴木の作品が示す様々な要素を手掛かりに、答えのないそれぞれの「音」について思考を巡らせていただく趣向となっていました。

展示に加えて、展覧会の初日と最終日に鈴木によるパフォーマンスも開催しました。オープニングの「パフォーマンス」なげかけでは、鉄角パイプと石による



メインとなったインスタレーション 《内在》

田辺市立美術館へのきもち②

私の勤務する浜松市秋野不矩美術館は、静岡県西部・浜松市の山間、天竜区二俣の地に建ち、この地の出身で日本画団体「創造美術(現・創画会)」を創立した画家の一人である秋野不矩(1908-2001)の画業を紹介する顕彰美術館として活動を行っています。昨年開館20周年を迎え、節目の年を飾る特別展として、田辺市立美術館との共同で画家の生誕110年記念展「秋野不矩—あふれる生命(いのち)の輝き」を開催しました。田辺市は創画会会員の稗田一穂の出身地でもあり、同館ではこれまで「創造美術」を結成して活躍した画家の芸術を回顧する展覧会を継続して開催されてきましたので、画家生誕の節目でもある2018年度に共同開催を実現させようと、3年前から相談しあって企画立案を進めました。お陰をもちまして秋野不矩の創作活動の成果をお伝えすることのできる充実した内容となり、大変多くの皆様に本展覧会をご覧いただくことができて安堵しています。

私が秋野不矩美術館で学芸職を拝命したのはわずか5年前のことで、当時学芸員は1名のみの配属でした。そのため、異動当初は前任者が準備を進めていた展覧会を右も左も分らぬま丸々引き継ぐような状況でした。その頃当館では前述の稗田一穂と、同じく創画会会員の毛利武彦との二人展の開幕準備が佳境に差し掛かっており、着任すぐに出品作品の借用に向うかなければならず、また私事ながら第1子の誕生を間近に控えていて、言い知れぬ緊張感の下で辞令を受けたことを記憶しています。配属されて約1週間後、学芸員としての最初の借用訪問先が田辺市立美術館でした。出発日の前日に妻が産気づいたため、一晩病院に付き添い、その足で出張に赴きましたが、田辺市立美術館では私の初の対外業務を学芸員の三谷さんに温かい目で見守っていただき、不慣れではありましたが無事務めを果たすことができました。実は、館訪問の直前に第1子誕生の報告を得ていましたので、学芸員として、親として、同じタイミングでスタートラインに立ったこととなります。このような自分自身の節目の時に田辺市立美術館との関わりができたことは、不思議な縁とともに特別なことのように感じています。

個人的な関わりを主に書かせていただきましたが、もとより両館は研究テーマにおいて近い志向を持っていたり、ともに全国美術館会議の小規模館研究部会に所属し、似通った課題を抱えていたり、共通する部分が多くあります。今回、両館の協力によって秋野不矩展の成功を見ることができたように、この先も両館で力を合わせていける可能性がまだまだあるように思われます。私自身の一層の精進と成長をお約束しながら、未永いお付き合いを賜りたくお願いいたします。

(浜松市秋野不矩美術館学芸員 鈴木 満広)

田辺市立美術館での「秋野不矩展」記念講演会にて



田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.30

編集・発行：田辺市立美術館/熊野古道なかへち美術館
発行年月日：平成31年4月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館 熊野古道なかへち美術館

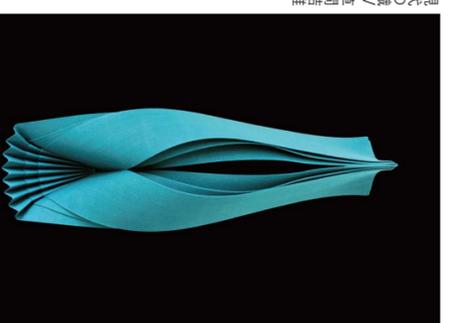
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近畿891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/



田辺市立美術館蔵 田辺市立美術館蔵 田辺市立美術館蔵

1. 小企画展 戦後の表現 戦後に展開した新しい表現表現を、彫像品を軸に紹介します。「彫像」、織の造形、「絵画(彫刻)」の三つの章で、多彩な作品を展示します。
2. 世界遺産登録15周年記念展 描かれた溝 「紀伊山地の霊場と参詣道の遺産」のユネスコ世界遺産登録15周年を記念して、熊野のシンボルともなっている溝の表現をテーマにした展示を行います。田辺市立美術館では、文人画と前面の表現に注目して開催します。
3. 特別展 文人画コレクション 当館が収蔵する文人画作品から、「買景図」やさまざまな心を写す風景の表現を紹介します。
4. 小企画展 原勝四郎と記憶の画家たち フランスを放浪して帰国した後、当地を離れることなく制作を重ねた原勝四郎(1866-1964)の作品を、記憶に記された画家たちの作品とともに展覧します。
5. 特別展 岸田劉生展 — 写実から、写意へ — 大正から昭和にかけての時期に独特な個性を発揮し、西洋的な写実の写実から、独特の写実的な「写意」へと移行していった岸田劉生(1891-1929)の表現の軌跡を、空間自動美術館のコレクションを軸にして振り返ります。

1. 特別展 現代の織Ⅴ 章間結 現代の織りた織の造形を紹介する展覧会シリーズの4回目。1970年代初めから70年代に達して右の織の造形に取組む、現在まで実際に織られている章間結(1946-)の制作を、最新作を主にして展覧します。
2. 世界遺産登録15周年記念展 描かれた溝 「紀伊山地の霊場と参詣道の遺産」のユネスコ世界遺産登録15周年を記念して、熊野のシンボルともなっている溝の表現をテーマにした展示を行います。熊野古道なかへち美術館では、日本面の表現に焦点をあてて開催します。
3. 特集展示 清高の画家 日高昌克 和歌山県御坊市出身で、本職の医業をやめて絵を描くことを生業とした異色の画家、日高昌克(1881-1961)の作品を紹介します。
4. 特集展示 没後50年 鍋井充之 没後50年となる近代の洋画家、鍋井充之(1868-1969)の表現を、好んで描いた花筒の風景を主題にした作品を中心に展覧します。



田辺市立美術館蔵 田辺市立美術館蔵 田辺市立美術館蔵